

みへな
熱血
音楽談義

出会いと...だわりが生む新境地

湖北を音楽的環境にリニューアル

好きな曲はなんですか。
好きな人と
一緒に歌いたい曲はなに？
好きな場所で
聞きたい音楽は？
いま、何か聞かせてみますか？
もしかしたら、
あなた自身が
自らも歌ったりして...

読んでくださいと、
音の場を提供し、
聞いてくださいと、
音の座をつくり、
いよいよ渡りましょと、
音の輪をひろげる

今回の特集は、
もろんなががで音楽に
携わっているひとたちに
登場いただきました

湖北が、いま
音楽のあるまじい
なれはいいな。

小森も大通りも
心地よい

サウンドがたゆたう
音の進み路となって



■出席者(敬称略・順不同)
池田洋 竹本和洋 松本茂夫 北島都也 前田社一郎 津田敏之
(平成18年3月9日 入戸岡にて)

津田 今日の座談会は、湖北の地で音楽に關わっている皆さん方から、口ごころ感じていることや夢見ていることをお話しいただき、豊かな音楽活動が息づく活気ある湖北の姿が描いていければと思います。

池田 私の親父は、若いときに中村メイコさんのメイフラワーという楽団でアコーディオン弾きをして、農学校、写真学校を出て、最後は楽器屋をやったという変わり種でした。皆さんにビジネスではお世話になっていきますが、私は管楽器人間でして、二十名ぐらいのビッグバンドをやっています。

津田 ジャズのビッグバンドというのと、この辺には池田さんたち以外にはないんですか。
池田 滋賀県では僕らのほかに膳所と守山と

う、ということをごさざるを得ない状況の中で、自分らの農業の形を模索している段階です。そんな中で、年に何回かの催しをやっています、その際に音楽を活用させてもらっていると、五年ほど前からコンサートをやっています。

音楽のフロが育つ環境づくりを

津田 今日は実に多彩なメンバーというか、やっていることがバラバラですね。(笑) こんないろんな話が聞けるといことは、湖北



▲池田洋さん。中学2年からアムトリックスを始め、大学時代は専らジャズのビッグバンド「ウィスパリング・ジャズ・オーケストラ」立ち上げに参加、帰郷後も木之本で昭和47年にビッグバンド「木之本スウィング」ジャズオーケストラ、を結成し、活動している。イグダ音楽代表取締役社長。

大阪の音大を卒業して、こちらに帰ってソコ活動のほか、ピアノを教えたり、コーラスの指導などをさせてもらっています。
松本 僕は、音楽は全然できないんで、場所を提供する側としてもっぱら楽しませてもらっています。

僕の場合、農業はどういう形がいいんだろ



共感 共生 下座

ビューティソシアル
たちはな
15-1 My street
Nagahama-city
PHONE 0749-62-1991
62-8248

プライム・ザ
たちはな
9-1 Kanatabi-shiro
Nagahama-city
PHONE 0749-64-7367

クレールバーン
たちはな
Yawata-shi
Nagahama-city
PHONE 0749-45-3896

商店街に蘇りたいやしの空間

「川崎や」(長浜市大宮町)



▶やわた夢生小路の「川崎や」。
会議室、演奏などに使用可。ただし音限定。
申込・問合せ先 谷口生花店
(TEL.0749-62-7379)

▶商店街の清水政伸さん



長浜八幡宮から、宮町の信号をまわりたいので西へ延びるやわた夢生小路は、長浜曳山祭りの曳山巡行の道でもある約三百メートルの商店街。商店街とはいっても、組合員の半分が仕舞た屋となった現在、そのことがかえって奏功してか、木造の建造物も多く残る通りだ。

曳山のまちにふさわしい景観をみんなで作ろうと、住民たちによる美しく住みやすいまちづくりを目ざすやわた夢生小路のなかほどに、「川崎や」という小さな民家がある。二十五年以上前の高校生には、たいそう懐かしい響きだろう。昭和の高校生が学校帰りにうどんを食べに立ち寄った「川崎や」に、数年前から、平成の高校生がライブを聞きにやってくるようになった。

「小さな建物だけど、ぎっしり入れれば四十人収容できますよ」と語るのは、商店街で眼鏡店を営む清水政伸さん。数日後に開くライブのための会場設営に汗を流す清水さんに、「川崎や蘇生物語」をお聞きした。

まちづくりの拠点として再生

「川崎やのおばちゃん」がうどん屋を開いた



▲奥の庭から商店街方向を見る。ただいまライブステージ設営中



▲客席には若い人の姿も多い



▲峰合清音さんを招いての「月夜にほっこりウクレレコンサート」

ていたのは、昭和五十年代の終わりごろまでやったと思います。おばちゃんが亡くなってからは、店はずっと空き家のままだったんです。貸してほしいという人も多かったです。貸しては、うまく折り合いが付かなかったんです。うね

川崎やは、家並みのなかにひっそりと溶け込んだまま、十年ほどを過ごす。三間の間口だが、まちの人たちにとって、ずっと気にかかるところだった。

「十五、六年前のことなんです。川崎やの前に数人の人が集まっていたんです。たまたまそこを通りかかったのが、商店街の会長だった花屋の谷口清士さん。聞けば、次の日に取り壊すという段取りをしているところだったんだそうです」

明日だって！ ちょっと待ってください、壊すのは待ってください！
「谷口さんをはじめ商店街の者が家主さんに頼み込んで、解体は待ってもらえることになったんです。ホッとしましたね。でも、まだ建物再生の糸口は見つからないまま時間が過ぎていったんです」

一人のミュージシャンが、その端緒となった。直接、その人が動いたわけではない。彼の周辺と、家主さんのそれとに、心地よく重なる部分が見つかったのだ。清水さんは、その重なりをなかにいた。
「偶然だったんです。思いがけないご縁でした。商店街のためならば協力しましょう、と言ってもらえたんです」

長年閉ざされていた川崎やの戸が開かれた。商店街ではさっそく市の空き店舗対策事業への申請を行い、総出で掃除にとりかかった。不要物が取り除かれると、おばちゃんが見つかった冷蔵庫やおくとさんが現れた。大工さん、県立大学の学生など、多くの人のアイデアや労力が注ぎ込まれ、その名も「川崎や」のまま再デビューしたの。二〇〇三年四月のこと。

地元商店街の人たちの熱い思いが通じての開店だった。

利用者 マスター募集中！

川崎やでの初めてのライブは、二〇〇三年秋だった。長浜の秋の芸術イベント「アート・イン・ナガハマ」の会場で出会った峰合清音さんを招いての「月夜にほっこりウクレレコンサート」がこけり落とした。小さな店は四十人の満杯となった。その後、不定期ながら続けられてきたライブ「癒しの小路コンサート」は、昨年から月一回の定例行事となった。

「最初からライブ会場としての活用を考えていたわけではなかったんです。まずは、まちづくりにつ

いて話し合う拠点がほしかった。その後、多賀の藝やさんに、運営方法などについて相談させてもらったりして、ギャラリィ、ライブ会場、会議、教室などに有料で利用してもらうことにしました」

二階の和室は、自治会、山組、長浜市史を読む会などの定例会議の場などに利用されている。そうそう「み〜な」の編集会議にお借りしたこともあった。商店街では、落語の公演、まちづくり講座、はたるの観覧会なども開催してきた。曳山祭りにはきつねうどん、大晦日には年越しそばの食堂も運営。長浜八幡宮で開催されている骨董市のオークション版を、ここで開催する計画もあるそうだ。

「月一回のイベントは、ちょっとしんどいところもあるけれど、商店街の人たちが力を合わせて活動できる場ができたことは元気の素。若い子たちもライブに来てくれるようになりました。これからは、幅広い交流の場になってほしいですね。そのためにも」と、清水さんは力を込めた。

「川崎やのマスターを募集中なんです。いつも店にいて訪問者を迎えてくれる人、この店の活用についてアイデアを提供してくれる人、だれかおられないでしょうか」

おばちゃんの使っていた厨房は健在だ。小さな喫茶店を営むこともできる。まちの拠点としての川崎やの扉をいつも開けていられたなら、もっと出合いの輪が広がることだろう。